
in the darkness

エリザベス・ブラウン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

i n t h e d a r k n e s s

【Nコード】

N 2 5 3 5 W

【作者名】

エリザベス・ブラウン

【あらすじ】

新聞記者ウィルは、恋人にプロポーズをする。
幸福に包まれる二人。

彼女が落とした片方しかないピアスが
互いに隠していた過去をしらしめ、それは交差し
皮肉な運命を映し出す。

彼女の片方しかきちんしていない耳、
謎の女と男、

家族の愛、

皮肉な運命、

若い二人は克服し、未来を築けるのか

第一話 恋人たち（前書き）

1950年代前後のアメリカ文化に憧れます。

帽子とスーツの男 ワンピースに白い手袋の女

カクテルと煙草と洒脱な会話にロマンスと謎が溶け込んで
ほんのひと時、甘辛い夢を見てほしい。

第一話 恋人たち

今夜は、夕立の後の湿った水たまりもしかめっ面をせずに受け止められる。

ウィルは、ポケットに入れた大事な物を落とさないよう、しっかりと手で押さえながら路地の最後の水たまりを飛び越えた。ネクタイが跳ね上がり、頬を打ったが舌打ちをする気にもならない。

暗いトンネルをぬけた先には、ささやかだがにぎやかな市場が広がる。どの店も夕闇にまけまいと裸電球をかけ、その熱い光の影にまけまいと笑顔で客を迎え入れたり、招いたりしている。

いつもの花屋の前に足をとめ、スーツのもう片方のポケットに手を入れた。

「毎度。兄さん。今夜はどれにするね？遅咲きのチューリップは？」

店主は、一本を彼の目の前に突き出した。いつもの彼ならばそれを小銭と引き換えに受け取り先を急ぐ。でも今夜はそうはいかないのだ。

「親父さん！これで買えるだけくないか？」

ウィルは札を付き出した。

「おやおや。特別だな。よし！おまけだ！」

店主は、大きなバケツに入った色とりどりのラをそのまま抜きだすと手早く新聞紙に包んでくれた。

「ありがとう！」

目指す、アパートはすぐに表れた。世紀末からある煉瓦作りのクラシックな建物は趣こそあるが道は悪く、雨が降れば、湿った空気と下水の悪さから嫌なにおいがあがってくるし、少しばかり地面にのめりこんで最大級の水たまりが玄関までの道をふさいでいる。ウィルは慎重にそれをまたぐと玄関先に入りこんだ。

3階までのらせん階段を二段おきに飛び上がってゆく。あっちこっちの家の夕食の匂いが混じって鼻をくすぐる。

クイズ番組に本気で答えて一喜一憂する大声。

赤ん坊の泣き声。

若い母親の子守歌。

子供の足る足音

叱る親の声。

今夜は、すべてが騒音ではなく、温かい励ましの声に聞こえる。
目指す部屋のドアは、神々しく光輝いてみえる。

ウィルは、はやる気持ちをおさえ、ドアをノックした。

第二話 片方だけのピアス

そのノックはいつもより、ずっときどって丁寧に聞こえた。

フローレンスはすぐに鏡に顔を映した。髪の毛は、この上なくうまくいった。ドレスもきれいだ。白いオーガンジーの襟がついたブルーのドレスは、彼が好きなドレスだ。もともと、よい夏服はこれ一枚きりだから、これを着ないわけにはいかない。

いつものように耳を覆うようにセットしている髪を少し上げてちゃんとしている方の左の耳を出して、そこについているピアスを見つめた。

彼女にとって、そのピアスは、命と同じに大切な物。手で大切に触れ、急いで髪を直すとドアを開けた。

彼女の優しい笑顔が現れた。

ウィルは、いつもそうするように小柄でやわらかい丸みのある体を抱きしめキスをする。きれいな髪をなでてみたいが、フローレンスは片方しかちゃんとしていない耳を誰にもさわられたくないし、見せたくないのを知っている。彼女の細い首までしかふれないようにしている。ウィルはそういう気持ちを汲んでやるのを、他人行儀とは思わなかった。

自分だけに、事故で少し形がないのだとおしえてくれた。それだけで十分だった。

「まあ！バラの花だわ！こんなにたくさん！」

フローレンスは花に埋もれながらリビングに進み、すぐにテーブルの花瓶に花を挿した。

どうやら、読まれている。この家にこんな大きな花瓶はない。お隣に借りてきたのだろう。

「今日は、時間通りだね。お仕事は大丈夫なの？」

フローレンスは、気持ちを抑えながら、うわずりそうになる声をお

さえて、いつもと同じようしゃべる事に努めながら、きれいなハシバミ色の瞳を向けた。ウィルの仕事は新聞記者だ。約束の時間などありそうでないのをあたり前に受け止めていた。

突然、頭ふたつ上にあるウィルの顔が下に落ちた。

彼は、床に片膝をつくとき、ポケットから指輪を取り出すとフロレンスにささげた。彼が買える範囲で買ったダイヤモンドの指輪が光った。

「フロレンス・チェンバース。僕と結婚してください」

フロレンスは、今夜、彼がプロポーズするとはわかっていた。ここは小さな町だ。おととい宝石屋から出てくるウィルを同僚が見つけた。彼女に報告してくれていた。

そして今夜は一年前に二人が初めてデートした日。

きつと今夜とわかっていても、こうして言われると胸は熱くなり、フロレンスは、早くイエスと言いたいのに喉に声がつまってしまった。

「フラン。イエスなら口を覆う手はずして、その手はこっちに出して……」

ウィルはおどけた口調で言った。彼女がそ通りにすると、静かに差し出された左手にウィルはその指輪をはめ、その手をとったまま立ち上がった。

いつもの位置に彼の少し幼さが残る顔がもどった。フロレンスは、つま先だつてウィルの肩に抱きついた。もちろん右側に。ちゃんとした耳の方をウィルの頬に近づけた。

「ここは、静かだけどすぐ水たまりできるし、僕の所は、騒音がひどい、少しばかり静かで水がでない家を急いで探そう。当面は二人で働けば、すぐに夢もかなうよ」

二人の夢は郊外に家を持ち、大きな犬とかわいい猫を飼うことだ。

「ええ……そうね。」腕を肩にあずけたまま、幸福に輝く笑顔を見せてくれた。

その時…。

何か小さなものが床に落ちて、その大きさのわりに大きな細い甲高い音を立てた。

フローレンスは、さっき触れたピアスがゆるんで落ちたのだとわかり、すぐにしゃがむとそれを拾い上げようとしたが、ウィルの方がそのピアスを先に拾い上げていた。彼女は、少し頬を赤くした。

それは耳を隠しているのにピアスなどしていたのを知られてしまったのが恥ずかしかったからだ。

でもなぜこんな事をしているのかウィルに話さなければならぬ。それは、ずっと躊躇していた事だ。

「あのね。ウィル。わたし、あなたに…」フローレンスは思い切った顔を上げたが彼女の顔はさっきの雨を降らした、雲のように暗く、くぐもった。

ウィルが―

そのピアスを真つ青な顔で見つめていた。

「ウィル？どうしたの…」

ウィルはそのピアスから目が離せない。

そのピアスは、小さいわりにずっしりと重い

金細工。

小鳥がくちばしにダイヤモンドの花をくわえている。

ダイヤは、小さいが素晴らしく美しい虹色に輝く。

そんな馬鹿な…フローレンスがこれを持っていると言っているとは…。

『もう片方は、わたしの大切な人が持っているの』

『あのダイヤモンドで1年遊んで暮らせるぞ』

懐かしい彼らの声が聞こえる…

第三話 美しい女

「ウィル！」フロレンスが肩にふれ、ウィルは我に返った。

彼女の手を優しく遮ると、部屋に進み、小さなソファに倒れ込んだ。彼女は隣に座り、ウィルの背に手をかけようとしてやめた。ウィルは、膝に腕をあずけ手は額を覆っている。そのいつも楽しい輝きの青い目は床をみつけ、瞳は忙しく左右に動いているのがわかった。

フロレンスは、思った。ウィルは新聞記者だ。まだ新米なので扱うのは、どこでフェスティバルがあつて、その子供たちの笑顔とか新作のおもちの記事だったりだが、隣の部署では毎日おこる事故や事件を追っている。色々な情報が山ほど入ってくる。彼もいつかは、事件記者になるのが夢なのでその手の情報には常に耳をすましている。

どこかで…このピアスの片方を持っている女の事を知ったのかもしれない。

この世界にひとつの個性的なピアス。

他にも細かい事を知っているのだろうか。

でも、すべては遠い街の事件。ここまで耳に入るだろうか。

彼女は、探るような気持ちを抱きながら、話かけた。

「ウィル……ピアスを返して。それはわたしにとって命と同じに大事な物なの……もう片方は姉が持っているの。ごめんなさい。孤児だなんて嘘なの。両親は亡くなっているけれど、姉が私を学校にやってくれたの。でも理由があつて姉の事は内緒にしていたの。このピアスは離れていても、いつも一緒にいられるように片方ずつもっているのよ」

ウィルは、フロレンスを見ずにピアスを渡してきた。彼女は受け取ると、髪にかくした耳につけた。

ウィルの頭の中では、抑え込んだ記憶の渦が幾重にも大きくなって

いった。

幼い自分の手を引く、温かい手のぬくもり。

背の高い大きな影

けぶる金髪に吸い込まれそうな青い瞳。

陽気な赤毛の太った老婦人

白いドレス

片方だけのピアス

口の悪いドクター

管を流れる血

人が消えた部屋

ウィルは、ゆっくりと顔をあげ、横に座るフロレンスに向いた。

彼女は、顔を下に向け、真新しい指輪をはめた手を強く握りしめていた。

「わたしが最後に姉に会ったのは16の誕生日よ。後は毎年、誕生日とクリスマスに手紙とプレゼントが送られてくるだけ、それも18の時に途絶えたわ。今はどこでどうしているのか。生きているのかさえわからないの」

悲しい色を浮かべ揺れている、そのやさしいハジバミ色の瞳がゆっくりとこちらを向いた。

知っている女の面影を彼女の中に見つける事はできない。どこか似ていたら、もっと早くに気づいただろうか。

『事故で耳が…』

それを聞いても抑えこんだ記憶は振り戻されなかった。

ウィルは、大きく息を飲みこんだ。

フロレンスは立ち上がり、テーブルに進むとワインをグラスに注ぎそれをウィルに渡した。ウィルは素直にそれを受け取ると飲んだ。乾いた口をアルコールが満たし、すこし楽にしてくれた。

「姉が……普通の暮らをしていないのは知っているわ。姉の事……

何かに書いてあったの？」

ウィルは顔を大きく振った。

「違う。フラウ。記者として彼女の事を知っているんじゃないんだ」
フローレンスは、胸がざわめいた。

「僕は、エレノアに知っている……初めて会ったのは、まだ子供のころだ」

あの夜

銀狐のショールを肩にかけ、真っ白なイブニングドレスの裾から銀色の靴が見えた。

玄関ホールに現れたエレノアは、映画のスクリーンから抜け出たようだった。

「子供は寝ている時間よ。坊や」

その迫力ある長身から、もっとハスキーな声を想像したが彼女の声はとても甘くて優しい。

ウィルは階段の踊り場で文字通り固まってしまった。

階下のドアが開いて閉まり、コートを羽織りながらフランクが出て、エレノアのそばによると彼女の目線が上にあるのに気づき、彼はウィルの姿をとられた。

タキシード姿のフランクは初めて見たけど、やっぱり映画の俳優みたいだ。

「ミセス・マクフラスキー！」フランクは奥に向かって声をかけた。

「旦那様？お忘れ物ですか？まあ！ウィル坊ちゃん！いけません」

ミセス・マクフラスキーはその大きな体のわりに俊敏な歩みで階段を駆け上がるとウィルの肩をかかえて、部屋に戻した。

「アンナ。のどがかわいたんだ。夕飯のお肉がからかった」

「ミルクをお持ちしますよ。さあベッドにはいって」

ウィルは、いつまでも子供扱いなのにむくれてベッドに入った。

「フランクおじさんが帰ったら教えてっていったのに！おじさんは今度帰った時はチェスを教えてくれる約束したんだ」

「旦那様はお着替えによられただけです。夜会服をお召しでしたでしょう。急なおよばれたったようです。またしばらくはお帰りになりませんよ」

「あのきれいな女の人は誰？」

「パーティーは女性同伴ですよ。旦那さまだってガールフレンドの一人やお二人おいでになりますよ。さあいい子にしてくださいください。ミルクを温めてきますからね」

「フランク……。叔父に初めて会ったのは、両親の葬式の時だ。残された10歳の子供を遠い親戚の誰が引き取るのかで……。大もめさ」
両親の死に打ちのめされているウィルの肩をささえてくれているのは式を挙げてくれた牧師とその奥さんだけで、遠い親戚は、舞い込んだやつかい事に頭を悩ませていた。

突然、車の音がしたと思うと、大きな男がドアに現れた。

帽子をとったその顔に、覚えがあるのは、親族の中で一番年かさの大伯母だけだった。

「フランク！あんた。生きていたのかい！」

「伯母さん。ご無沙汰してます。その子がウィリアムですか？」

「そうだよ。あんたの兄さんの子だ。ウィリアムこっちにおいで」

フランクは、その大きな体がかがめ、ウィルを迎え入れると短く言った。

「今すぐ私と来るか？来るなら連れてゆく」

フランクはウィルの髪をくしゃりと撫でた。

仕事から戻る父親がそうしてくれたのと同じ温かさを感じた。ウィルは、すぐに頷いた。

パパの弟？そんな事初めて聞いた。全然似ていない。このおじさんは黒い髪だし、肌の感じも少し違う。

でも、この数日で一緒に来なさいと言ってくれた大人は彼だけだし、自分に触れてくれた親族も彼しかいなかった。

フランクが立ち上がるとウィルの頭は彼の腰より低い。

「この子の身の回りの物は何もいりません。何か形見になる物だけ渡してやってくれませんか？」

親戚は誰も席やその場を動かず、隣やその向こうの者とただ無意味な会話をかわすだけだった。フランクに対峙する大伯母も、手をこまねいているだけだ。牧師が小さな写真立てをとるとウィルに渡した。

両親が写っている。

「この家の唯一の財産は、結婚指輪くらいです。それは夫婦とともに埋葬しました」

「牧師様。ありがとうございます。ではこれで失礼します」

フランクは軽く一同を見回すと帽子をかぶり、ウィルの手を引き出で行った。

牧師は、大伯母に声をかけた。「ウィルの叔父さんにあたるのですね。身なりはいいし、お金持ちのようだ。ウィルは安心ですね」

彼女は、振り返ったが、問題が解決したせいせいの顔ではなかった。

「あれは、ヤクザモンです。とうの昔に縁も切れている。ウィルの父親とは腹違いだね。母親は得体の知れない東洋人ですよ」

牧師の奥さんは顔を曇らせたが、この冷たい親族をたらいまわしに生活したり、施設にあずけられるよりは、きっとよかったのだと思う事にした。

「僕は、文字通り身一つで叔父に連れられ、初めて飛行機にのり、その日のうちに着いたのはシカゴだった」

湿った空気と雨の匂いがする街。

初めて見る大きな都会の夜を初めて乗ったタクシーが走り抜ける。

瀟洒な石作りの家が並ぶ一画に連れてこられると、その中の一軒の玄関で白いエプロンをかけた太った中年の婦人が迎え入れてくれた。

「おかえりなさいませ、旦那様。ウィル坊ちゃん、お腹はすいていませんか？お風呂に入ってから、ミルクと夜食を召し上げられ、ゆっ

くり眠ったら、朝ご飯をちゃんと食べられますよ」

彼女は有無をいわず、すべてをその通りに実行した。

翌日からもすべてがミセス・マクラフスキーの仕切りで進み、3ヶ月を過ぎるころには、ウィルは学校に通い、友達もできて大都会に生活になじんでしまった。

ただ、フランクが家に帰る事はほとんどなく、帰ったとしてもウィルが学校にいている間だったり、ウィルがもう寝入ってからだったりで、ほとんど会う事がなかった。

ウィルは自分の生活の基盤がすっかりしてくると、周りが気にならだしてきた。

「おじさんは何のお仕事をしているの？」ウィルは、キッチンのテーブルでおやつのでエリートタルトを食べながら言った。

「さあてね。毎週ちゃんとお給金をいただいています。冷蔵庫にはたっぷり肉も野菜もありますし、坊ちゃんの服はしみ一つありません。いい学校にいつているし、何の不服がありますね」彼女も豆をむきながら言った。

「アンナに家族はいないの？」

ともに寝起きする気のいい家政婦アンナ・マクラフスキーの事も気になりだした。

「亭主はむかしに死にましてね。娘は、成人してフロリダにおりますよ。坊ちゃんもよく勉強して、好きな仕事について、好きな町で暮らすことです」

「フロリダは遠いね。僕が大人になればアンナは子供に会える？」

アンナは、ウィルの頭を優しくなでてきた。

「坊ちゃん。アンナを早くやっかい払いしたいですか？」

ウィルはびっくりした。

「違うよ！アンナ！僕、アンナがいないと困るよ！」

アンナは静かにほほ笑んだ。

いつもは大口を開けて大きく笑うのに…いつもと違うアンナの顔。

その顔はとても上品だった。

「坊ちゃん。アンナは昔、旦那様に助けていただきましてね。おかげで子供も大人になれました。それからアンナは、ずーと旦那様に
お仕えしています。誰が何を言おうとご立派な方です」

第四話闇の影

「次にエレノアに会ったのは、ずっと後だ」

ウィルのその両手は強く握られ膝に置かれ、まっすぐ前をみたままだ。フローレンスは、テーブルに体をあずけたまま、黙って聞いていた。

「僕は、フランクの庇護のもとで、何も考えずに成長していった。あいかわらずフランクは忙しく、めったに会えなかったけど……今思えば、あえてそうしていたんだ。でもわずかの時間でも僕の父親代わりを立派に努めてくれた。一度だけ、休暇をとって旅行に連れていってくれた事があった。僕は14だった。イタリアに行ったんだ。素晴らしい国だった。彼は僕に本物の芸術をたくさん観ると言ってくれた」

ウィルの横顔が一瞬輝いたが、すぐに曇った。

「あれは……17の夏だったと思う……アンナは持病の血圧で寝込んでいて、僕が食事を運んで行った時にアンナの部屋の電話が鳴った。僕の部屋にはないのにアンナの部屋には直通の電話があるって初めて知った……」

ウィルは受話器を取るとアンナに渡し、部屋を出ようとドアを開けた。電話の相手は、一方的に何か話しているようだ。

「いいえ！いいえ！どうにか歩いてみます！でも旦那様……でも……それは……」

アンナの悲痛な声がドアを閉めかけたウィルの手を止めた。

「坊ちゃん変わってください……旦那様からです……」

変わるといつもの落ち着いた深い声が聞こえてきた。

「ウィル。今から女性が訪問する。わたしの書斎に通しなさい。彼女がそこで必要なものをとる。書斎の鍵がどこにあるかはアンナに聞きなさい。お前は鍵を渡し、受け取るだけだ。部屋には入っては

いけない。約束しなさい」

一言だって口をはさめない迫力にウィルは、ただ頷いた。それでよしとフランクは電話を切った。すぐに、玄関のベルが鳴った。

「アンナ。書斎の鍵はどこ？」

白いスーツとそろいの帽子には厚くベールがかかっていて顔がよく見えなかったが、間違いなく、ずっと前に会った白いイブニングドレスのあの女性だと思った。

彼女は、無言で白いバックをウィルに投げ、まっすぐに書斎に向かった。

ドアノブが言うことをきかないのがわかると、彼女は憤然とウィルに向いた。

「鍵は？早くして！」

「待つてください…。今、持ってきます」ウィルは、はじかれたようにキッチンに向った。その背中を追い立てるように女は「早く！」と急いて言った。

ウィルは、棚を開けると、並んだ調味料の瓶に目を走らせた。

砂糖、塩、オイル、小麦粉、イースト、押し麦……。あった。押し麦の瓶の蓋の裏に鍵が隠してあった。

鍵を受け取ると彼女はドアを大きく開けるのも、もどかしいとばかりに滑り込むように部屋にはいり、すぐにマニラ封筒を抱えて出てきた。

ウィルの手からバックをもぎとると閉めた鍵を返してよこし、そのまま出て行った。

——ウィルの手には鍵がある。

「坊ちゃん！！後生ですから。こちらに来てください！」アンナが大声でウィルを呼ぶ。

まるで彼の好奇心を見透かすように。

アンナはベッドに弱弱しく収まっていた。

「坊ちゃん。鍵をアンナに返してください」

「アンナ……鍵をまだ閉めてないから、閉めてくる」

「いいえ。鍵の閉まる音を聞きました。エレノア様が閉められました」

ウィルは、鍵を渡した。

アンナは鍵を握りしめた手を毛布の中にしまい込んだ。

「アンナ、彼女はずっと前にフランクとパーティーに出かけた女性だよ？エレノアっていうの？」

「坊ちゃん。休ませてください。薬が効いてきてやっと眠ります。明日には起き上がれますよ。ご不自由かけました」

ウィルの目の端にテーブルクロスが舞ったかと思うとバラの花が水をまきちらして大きな音とともに床に落ちた。

「フラウ！」ウィルは、床に倒れたフローレンスを抱えた。

彼女は気を失っているわけではなかったが体はひどく震え、その目は恐怖におびえている。真っ青になった唇は何かを言い続けているが、声は聞こえてこない。彼女は頭をかかえ、ウィルの腕の中で小さく体を丸め震え続けた。

「フラウ。落ち着いて……さあ、ソファーに座って水に濡れてしまっ」腕を腰にまわし、立ち上がれせようとした時。彼女の髪がスーツのボタンにひっかかり、持ち上がった。

ウィルは、はからずもその耳を見てしまった。

耳はわずかに土台をとどめているだけだ。

切り取られた……その表現がぴったりだった。

あの時、動揺していたエレノアと今、恐怖に怯えるフラウ……。離れた時間軸はウィルの記憶の中で繋がっていった。

突然、フローレンスは、強い力でウィルの体を押しのけた。

彼女はよろけながらも立ち上がり、守るようにその腕を両肩に強くまきつけた。

「そんな目でみないで……」

「フラウ。僕は何も……」

「みんなが見るの……みんなが口ぐちにささやくの……運び込まれた病院でも……看護婦が噂していたわ……やってきた警察もみんな、わたしを……蔑むように見たわ」

「フラウ。落ち着いて、僕はそんな風には思っていないよ」

「あの人は違った。会ったことのない上品な婦人が病院にやってきたの」

フローレンスは、とても落ち着いた声だ。

「名前は名乗らなかつたけど姉の代理で来たと。彼女は、とても愛情に溢れた温かいまなざしでわたしの頬をなでくれた。ママみただったわ。その人はわたしに生まれ変わるために必要なものをすべてくれた……。新しい出生証明書には、フローレンス・チェンバースって書いてあった。彼女は言ったわ。すべて忘れて生きなさいと。わたしは、フローレンスになって、そしてシカゴを離れてこの町に来たの。4年前よ……」

ウィルは、その言葉を聞きながらも、からみあう記憶にどんどんと絶望を感じていた。

書斎を開けた夜からどれくらい後だったか、フランクが帰ってきた。ウィルがはやる気持ちでリビングに走り込むと大きな白い帽子が振り返った。

「ウィル。紹介がまだだったな。彼女はエレノアだ」

優美な白いレースのサマードレスのたつぷりした裾をゆらしながら、嫣然としたほえみを赤い唇に浮かべ、エレノアはウィルのすぐそばに寄ると、帽子をとった。

彼女は、会うたびにまるで印象が違って見える。

今日のエレノアは、肩先で髪をかわいらしくカールさせ、白いカチューシャをして、まるでどこぞのご令嬢のようななりだ。

「すっかり大人になったわね。前に会った時はとても小さかったわ」

先夜に会ったのは、なかった事にしろと言う事なのだろうか。怪訝な気持ちを持ちながら、目の前に差し出された、ぬけるような白い手と妙な形で握手をした。

エレノアは、小さく笑うと「レディが手の甲を差し出したらキスするのが礼儀よ」そう言うのと椅子に腰かけ長い足を組んだ。

「フランク。そういう事、きちんと教えてあげなさいな」

「必要ない」

「チェスは教えてくれるよ」

ウィルはフランクが座るソファアの袖に座った。

「男性は戦うことばかりね。いいわ。ウィル。わたしがガールフレンドとうまく付き合える方法を教えてあげる。好きな子いるの?」かわいらしく首をかしげる姿にウィルは、ドキリとしてしまった。

「別に……今は、勉強が一番だし……あの……それより、あなたは、一体いくつなんですか?」

ウィルは気はずかしいのを隠そうとあわててしまった。

エレノアは、唐突に失礼な質問に目を瞬いた。

フランクが大声で笑った。

ウィルは、フランクがこんなに笑うのをはじめて見た。

「す、すみません! その、変わらず若くて美しいので……なんだか時間が停まったみたいで……」

エレノアは気を悪くした風もなく、バックから細い煙草をとりだすと口にした。笑いを抑え込んだフランクが火をつけてやる。

「わたしは、秘薬をもっているから永遠に年をとらないのよ。でも他の女性には、けっして聞いてはいけないわ」

彼女の片耳のピアスのダイヤが窓から射した夏の日を受けてきらりと輝いた。

「あの。ピアスを片方、落とされていますよ」

「大丈夫よ。片方しかないの。もう片方はわたしの大事な人が持っているのよ。そんなに緊張しないでウィル。あなたと仲良くしたいわ。学校は? 楽しい?」

アンナがワゴンでお茶を運んできたが、三人が楽しそうにたわいのない話に花を咲かせている光景にあまりいい顔をしていない。

「ありがとう。アンナ」ウィルは、素早くそばによると茶器を取り、それをエレノアに渡した。

「ミルク？レモン？」

「いいえ。何もいらないわ。ありがとう」エレノアは優しくウィルを見つめた。

お茶を渡すだけで、彼女の騎士になった気分だった。この奇妙な昂揚感は、アンナによって遮られた。

「ああ！坊ちゃん。忘れました！たいへんだ。キッチンに行ってください！早く！早く！アンナを助けてください」アンナは、ウィルのシャツを引っ張ると連れ出してしまった。

「アンナにとってはいつまでも子供なのね」

「エレノア……」フランクは、茶器をテーブルに置いた。いつもの冷静な顔だ。

「ウィリアムには、かかわってくれるな。あの子はこっちの子だ」

「ええ。わたしのあの子と同じね。でも……わたしのあの子は闇を知ってしまったわ。あなたも気をつけなさい。彼がいつ囚われるかわからないわよ」

「——明日には、すべて整えられる。君が行くか？」

エレノアは、横に置いた帽子をかぶり直すとバックをとり、ドアに向かった。

「会えるわけじゃないでしょう。アンナにお願いして頂戴。彼女が適役よ」エレノアは、ドアに手をかけ振り向いた。

「フランク。感謝しているわ。あなたがあの情報を渡してくれたから。でも、あなたには痛手を負わせてしまった……この借りは必ずお返しするわ」

第五話 見えない溝

エレノアが帰ってしまったと聞くとウィルはひどくがっかりした。でも、めずらしくフランクが夕食と一緒にと言うのでウィルのふさぐ気持ちは一掃された。ゆっくりフランクと過ごすのはほんとうに久しぶりだった。アンナもはりきって、テーブルには乗り切らないほどの料理が並んだ。

フランクは、ワインを飲みながら、ウィルの話に耳を傾け、相槌をうったり、彼の小さな悩みに適格なアドバイスをくれたりした。時たま、ガールフレンドの事もまぜたが、少しばかりいいように言ったのは、フランクには、ばれているようだ。

「夢は新聞記者か……」フランクは、ワインのグラスを見つめた。

「後を継いでほしい？でも僕はあんまり数字は強くないからな」

フランクは、少しだけ目線を泳がせた。

「フランクは公認会計士でしょう？アンナが教えてくれた。いくつもの大きな会社が顧客だって……お金持ちだから僕を引き取れたんだね。必ず、恩は返すよ。まってて」

「恩など感じなくていいんだ。ウィル。お前は兄の子だ。わたしが引き取るのが当然だ」

「でも……知らなかった。おじさんがいるって……」

「お前も大人だ。理由は分かるだろう」フランクは、親指をこめかみにあてた。

それは、その肌と髪と瞳の色すべてをさしている。ウィルは、そんな事は意味のない事だとわかっているし、気にした事などなかった。フランクはもつとも近い肉親であることに変わりはない。

「最近、後ろ姿が似てきたってアンナに言われるんだ。卒業パーティーにフランクのタキシード着れるかな？」

「肩が合わないだろう。近いうちに仕立てに行こう」フランクはすっかり大人になったウィルの事がほんとうに誇らしいと思った。

そして別れが近づいているのを悲しく感じていた。

ウィルは調子にのっているのを十分に感じながら、ずっと聞きたかった事を思い切って聞くことにした。

「あの。エレノアはフランクの恋人なの？」

フランクの頬に厳しい影が戻った。言ってはいけない事を言っってしまった気まずい空気が襲うのをウィルは感じた。でも、そんな悪い事を聞いているわけではないはずだ。もしかして……ウィルの頭に別の扉が開いた。

「僕がいるから結婚できないとか……なの？」

メインの料理を誇らしげに運んできたアンナは、そこに足を止めた。「ウィル」フランクは、いつもの静かな深い声で言った。「エレノアはビジネスパートナーだ。それに誰であっても彼女を、恋人や愛人や家庭の主婦にはできない」

フランクは、手をかざして、アンナに合図を送った。妙な空気を一掃するようにアンナは二人の間に大きな体を割り込ませた。

「さあさあ！アンナ特性のローストチキンですよ！たとと召し上げられ」

「ミセス・マクフラスキー。あなたも席について。せっかくだ。一緒に。ウィル。椅子を引いて差し上げなさい」

「まあ！そうですか。では遠慮なく！」アンナは大袈裟に笑い、椅子を引くウィルにウィンクをしてきた。

フランクは主人として、鮮やかな手つきでチキンをさばき、とりわけ。

その後は、彼女の日常の世界についてのこまごまとした話やウィルの子供時代の思い出やらアンナの独壇場で終始した。

何も言わないウィルに向って、フラウは静かに語りだした。

「わたしの本当の名前は、アナスタシア・ヴァルナフスキー……」

姉は、エレオノラ。両親は、ロシア革命で亡命してきたロシア貴族よ。すべてを失って赤ん坊の姉を連れて亡命したの。わたしは、この国で生まれたから姉とは年がずいぶん離れているの。わたしが

5歳の時には、姉は家出をして行方知れずになった。それから流行病で両親を亡くして、わたしは施設にはいったわ。今までも貧しかったけれど、施設の生活はもつと酷かった。ある日、きれいな女の人が迎えに来てくれたの」

「エレノア？」

「そうよ、姉さんが、わたしを救いだしてくれたの。すぐに寄宿学校に入学させてくれたわ。その時にこのピアスをくれたの」

『アナスタシア。これは、お父様とお母様が唯一国から持ち出した宝石よ。皇帝陛下から賜った品なの。わたし達と一緒にはいられないけれど、これをお互いに身に着けましょう。そうすればいつも一緒よ』

「姉の事を恨んではないわ。今でも会えるなら会いたい。姉は両親と幼いわたしの暮らしを少しでも楽にしようと、闇の世界に身を投じていった……いつかはみんなで祖国に帰りたいと思っていた。でも革命後の祖国は自由を失い、いろんなものを見失う国になってしまった。もう戻る事もかなわない……彼女はいつもそれを憂いていたわ」

フロレンスは、指輪を抜くとそれをウイルに差し出した。

「お返しするわ。わたしの秘密は、お墓まで持っていくつもりだった。虫が良すぎたのね。まさかあなたが……ずっとかわりがある人だったなんて」

ウイルは、差し出される指輪を受け取らず、花瓶を拾い上げ、テーブルに置くと、花をそこに戻した。

「フロレンス。僕は、君に起こった事を知っている。でも、それで君を嫌いになったりしない。蔑むなんて、そんな気持ちはみじんもないのは信じてほしい」

ウイルは、まっすぐにフラウの目の前に立った。

「じゃあ……なぜ、あなたは、この世が終わったような顔をしているの？」

「それは……」

「気持ちを隠さないでいいのよ。わたしのような娘に、プロポーズをする人はいないわ。でも、少しでもまだ優しい気持ちがあるなら…わたしを一人にしてちょうだい」

フローレンスは、指輪をウィルのポケットに押し込むと、寝室に入ってしまった。

鍵の音が二人の間の大きな見えない溝をなぞった。

ウィルは、部屋を出るとさっきとは、えらく違う気持ちでらせん階段を降りた。

外玄関の大きな水たまりに足をとられ、靴の中に水が湿りとてつもなくやりきれない気持ちがその嫌な冷たさのように体中に広がって行った。それを吐き捨てるかのようにポケットの指輪を路地に向かって投げると道を進んだ。

歩きながら、ウィルは記憶をたどっていた。

フローレンスが言っていた、上品な婦人とはきつとアンナの事だ。

第六話 血

「坊ちゃん！あの、ずいぶん早いお帰りですね……」

玄関先でぶつかったその人は、きれいな服を着たアンナだった。

アンナはきれいに化粧をほどこし、彼女の赤毛と緑の瞳によく似合うバラ色のスーツは、太っているばかりと思っていた体にもちゃんとウエストがある事をしらしてくれている。背の高いウィルからは、粹な帽子のピンもよく見えた。

「エプロン以外のアンナを初めて見た。すごく素敵だよ」

「ありがとうございます。あの、お夕飯の支度までには戻ってまいりますから」

「デート？婦人会？なんでもかまわないから、ゆっくりしてきなよ。食事は適当にしますから。楽しんできて」

アンナは、頷きながら出て行った。

ウィルはソファに寝ころがり、テレビを観ながら、ハンバーガーを食べていた。アンナやフランクがいたら絶対にゆるされない行儀の悪さだ。

「あら。坊やだけなの？」

開け放してあったリビングのドアに、エレノアが白いビーズのイブニングドレスで立っていた。

ウィルは、バーガーを喉に詰まらせた。

「フランクはまだ？約束しているのだけど」

「あ、あの、約束しているなら戻るでしょう。車が………混んでいる時間だし」苦しい息をコーラで押しこんだ。

エレノアは、そうねと頷くとまるで水の上を進むように歩くと当たり前のようにウィルの隣に座り、頬杖をついてテレビを観た。

ウィルはあわてて子供じみたテレビ番組のチャンネルを替えにいき、ソファに座りなおした。思いのほか、エレノアと肩がふれあった

ので、ウィルは、さりげなくテーブルに食べかけのバーガーを置きながら、ナプキンを取り、ソースだらけの手と口を拭きながら、間をあけて座り直した。

夕方のニュースが流れた。また、ギャングの抗争だ。レストランでどこぞのボスが襲撃されて、一般人も巻き添えをくんだようだ。

「マフィアは専門のレストランで食事するべきだ！そうでしょう？マフィア専用の道路もあればいい」ウィルは、コーラを飲み干した。「それでは、人種差別と同じよ」

「違いますよ。区別だ。マフィアは悪い事ばかりしでかす、ひどい事ばかりする政府も警察ももつと厳しく取り締まればいい」ウィルはテレビを観たま言った。横はむけない。すぐそばにエレノア体温を感じる。ウィルは、咽のあたりが熱くなった。

「ウィル。ニュースになっているマフィアの事件は、みなが喜ぶ派手で物騒な事件だけよ。物事には裏と表がある。真面目な会社員だけど、家庭では妻に暴力をふるう亭主もしるし、マフィアのボスが孤児院を建てる事もある。善良な市民が殺人を犯したり、強盗犯が保安官だったこともあるわ」

「そうだけど。でもマフィアのやっていることは理不尽すぎ……」エレノアの美しい顔が覗き込んできた。

彼女は体をななめにぐつとウィルのそばに体を寄せている。ウィルの瞳は、驚きでせわしなく動いた。心臓の音が耳元で聞こえている。「きれいな青い瞳ね。わたしを見て……」彼女の細くて長い指がウィルの髪に伸びた。「ウィルは、女の子にもてるでしょう？背も高いし、きれいな金色の髪に青い眼。王子様みたいだわ」

「あ……あなたこそ……地中海のような青い……色だ。とても……きれいだし」

「まあ。口説き文句が言えるようになったのね……」エレノアの甘い息が唇にかかった。「地中海を見たの？」

「子供の時……フランクがイタリアに連れて……」エレノアの赤い唇で言葉をふさがれた。

ガールフレンドとするキスとは違う、頭の中がしびれきって何も考えられない。背中がソファーについて、エレノアのやわらかい胸が自分の胸に押しあたるのを感じた。エレノアからはとてもなくいい香りがする。彼女のドレスの背中は大大きく開いていて、そのなめらかな肌に触れる事ができた。

ウィルの夢心地は、突然、玄関が激しく開いてしまる音で邪魔された。

エレノアは、体を起こすと、素早くそちらに向かった。

ウィルは、手の甲で唇をぬぐった。まるで血のように口紅がついているのを不思議な気持ちで見つめた。

「ウィル！早く来て！」慌てたエレノアの声が響いた。

またもやドアが開き、今度はアンナの叫び声が響いた。

「だめです！だめです！来てはいけません！」

「ウィル！手伝って！！」遮るようにエレノアが叫んだ。

さすがにただならないものを感じウィルは玄関ホールに飛び出た。

エレノアが、ホールにしゃがみ込み、そのドレスのビーズから血が下ったっている。彼女の腕の中に、フランクが倒れていた。

「何があつたの？」ウィルは文字通り青ざめた。

「アンナ。ドクターに連絡して！わかるわね。本物の医者と呼ぶんじゃないわよ！」

アンナは、転げるように奥に消えた。

「ウィル。こちらに回って。わたしが足を持つから。部屋に運ぶわよ」

「む、むりだよ、僕より背が高い……」

「しっかりしなさい！フランクを玄関先で死なすつもりなの！」

エレノアの形相にウィルは従った。もどってきたアンナもくわわり、フランクの大きな体をどうにかベッドに横たえた。

エレノアは、ハサミでフランクの上等のスーツやシャツをかまわず切り裂き、取り除き、どこが怪我をしているのか確かめると、タオルをさいて止血し、流れる血を拭いた。

しばらくするとドクターと呼ばれるこれと言って特徴のない中年の男が白衣を着て現れた。

彼が医者らしい黒い診察バックからさまざま器具をとりだし、エレノアとアンナが看護婦のようにそれを手伝った。

「まってよ！どうして救急車を呼ばないの！これじゃ死んでしまうよ！」

振り返ったエレノアが、ウィルの頬を打った。

「黙ってなさい！」きれいに結った髪は乱れ、白いドレスは真っ赤だった。

おかしいとウィルは思った。アンナもエレノアもこのドクターも…

…何か共有している。自分だけが知らない。そんな空気が漂った。

フランクのうめき声が乾いた部屋にくぐもった。

「気づいたか。もう大丈夫だぞ」

「フランク！奴らね！ロツソの手の者でしょう！汚いやつら！わたしがかたをつけるわ！」

「もうボスが動いてくれている……お前は黙っている」

「いいえ。ボスに任せられないわ。あの件だって頼んだのよ！妹を助けてくれて、でも助けてくれたのはあなただった。あの一件を渡してくれたから……妹は解放されたのよ」

「エレノア……ボスは家族は守る。お前の妹は違う……向こうの間は守れない……」

「多少のリスクはあると思ったけれど、こんな手で出てくるなんて……」

「しゃべるな。フランク。よけい血が足らなくなる。誰か、同じ血液型は？」ドクターが周りをみまわした。

「僕が……同じです」

「よし、腕をだせ」ドクターは、止血用のゴムを振り回した。ウィルは、ベッドに腕を乗せるかっこうで床に座り込んだ。

「若いから、多少とっても死にやせんだろう」

「ドクターやめてください。坊ちゃんに何かあればあたしは生きられません」

アンナは泣き声だ。

「ふん！だいたい、堅気の人間をそばに置くのが間違っているだろうが。エレノアあんたもそうだ。妹に情をかけたがために、グランデのやつらに誘拐されたんだろう？よりによってあのグランデだ。フランクがやつらのほしがるロツソの情報を流したから助かったんだろ？おかげで、フランクはロツソの奴らにこれだ。まあ逆なら、完全に海に浮かんだけどな。ロツソならばこれ以上は手を出さんよ。ボスが動いたならなおさらだ」

ウィルは、血がとられているせいだけではなく、気分が悪くなっているのを感じた。彼らが言っていることは、まるでテレビで見るギヤング映画の中で言い交されるようなものばかりだ。彼の気持ちに気づいたかのようにフランクの手が伸びて管でつながる手に力なく触れた。

ウィルは、フランクの顔を見つめた。

真っ青なその顔は、ぐっと年老いて見える。

フランクはいくつなんだろう。聞いたこともなかった。

その手は変わらず、温かい。

ウィルはただ、管を流れる血をじっと見つめた。

それは血液型が同じだけでなく、肉親のつながりのある血なのだ。

血 - 2

ドクターの遠路ない血の取り方のせいもあってウィルは、一人で歩けず、彼に支えられて部屋のベッドに体を横たえた。

「ドクター……みんなマフィアなの？」ウィルは、声をかけた。この男ならなんでも話してくれそうだ。

「何もはなさんぞ！フランクに殺される」

「フランクは人を殺すの？……」

「……むむ…フランクは金庫番だ！マフィアにもいろいろな役目があるんだ。もうしゃべらんぞ！」

ウィルは胸がざわめいた。

「アンナも？」

ドクターは、鞆の中をこそごと探り、薬と注射器を取り出した。
「アンナはロシア人だ。若い頃にロシア革命を逃れてこっちに來た。皇帝に仕える女官だったそうだ。まあ今はどこにそのお上品さをやつちまったのかわつてな……はっはっ！」

ドクターは、何かの注射をウィルの腕に刺した。

「エレノアの妹は、無事に戻ってきたの？」

「無事？お前の無事の基準がわからんから答えられん」

「骨を折ったとか……」

「折っていない」綿をテープで止める。

「ひどく殴られたりとか？」

ドクターは立ち上がりながら、鞆に使った器具を放り込み、口をへの字に曲げて小さく言つた。

「妊娠はしなかった」

ウィルは、自分がほんの世間知らずの坊主でしかないと思い知らされた気分だった。それから、あまりの不快さに吐き気が襲つてきた。体を起こし、真つ青なつて、手で口をふさいだウィルを見て、ドクターはあわてて周りを見回したが何も受けれそうなものがないのがわかるとベッドカバーをはずして丸め、彼の口の下に持つてきた。ウィルは顔を横に振つた。

吐き気は、胸で収まつたが不快感はぬぐいきれない。

「言つておくが俺たちの仲間は、ロツソやグランデの極悪かつ馬鹿な組織とは違つぜ。政府の高官も仲間にいるんだ。格が違う。変な目で見ないでくれよ」

「マフィアにそれ以上も以下もないよ……」

「なあ。お前は、まだ高校生だろう？それでも色々あつたらうよ？俺たちはお前の倍以上も生きているんだ。もつと色々ある。大人になればなるほど事情も複雑になる。自分の責任においてそれを解決していかならん。それをとやかく言うな。な？」

彼は、まるで鉛を持ち上げるように小さくうめきながら鞆を持ち上げとドアにむかい、おおそうだと振り返った。

その顔はにやけていた。

「坊主。口がピエロみたいになっているぞ。ふいとけよ」

やけに糊がきいた清潔なハンカチを投げてよこした。

どれくらい眠ったのだろうか……。額に感じた冷たさでウィルは目を覚ました。

「気分はどう？」エレノアの甘い声が耳元に聞こえた。

ウィルは全身で驚いたが体は重く、跳ね起きる事はできなかった。

「熱が出ているのよ……。朝にはさがるだろうってドクターが言っていたけど」

スタンドのわずかな明かりが絹の白いナイトガウンに金髪の巻き毛が流れているのを浮き上がらせている。

「今夜からしばらく泊めてもらうことにしたの」言いながら、頬の汗をふき、その手が首に流れた。

「ア……アンナがそんなおしゃれな寝間着を着ているなんて……意外だな」ウィルは、またエレノアがキスしてくれたらと妙な気持ちを持った。

「借りたのではないの。わたしのよ。女のバッグにはいろんなものが詰まっているのよ」

エレノアはタオルを横に置いた洗面器の冷たい水にゆらした。氷の冷たい空気がわずかに流れてきて、ウィルは冷静さを取り戻した。

「——みんな。マフィアなんだね」

「一言で片付けられるものではないのよ」エレノアは白い肩で答えた。

「妹さんは……もう大丈夫なの？」

エレノアは少しこちらに横顔を向けた。

「ウィル。妹はあなたと同じ年よ。まだ高校生よ」

ウィルは、息を飲んだ。勝手にすっかり大人の女性を想像していた。

同級生の無邪気な女の子達が浮かんで消えた。

「あの子は違う土地で違う人間に生まれ変わるの……。世間は冷たいわ。誘拐された若い娘は、蔑まれた目で見られるものよ。何もなくてもあつてもね。私が言っている意味わかるでしょう？」

ウィルは小さく頷いた。

「だから違う名前を与え、違う人生を歩ませるのよ。でもそれも組織の力だわね……。皮肉だわ」

あの夏の夜、ベールで隠した顔から、ちらりと見えた唇は色を失い、鍵を開ける手は小刻みに震えていた。

「マフィアは誘拐すると体の……。一部を切り取って送りつけるって本当？」

エレノアは、立ち上がると、いつもの優美な足取りでドアに進みドアを開けた。廊下の明かりがエレノアの全身を縁どって輝かせた。

「おやすみなさい。ウィリアム」

翌日には、ウィルは体調がもどったが、すべてに違和感を覚えた。

「まあ。坊ちゃん。やはりお若いですね。朝食を召し上げれそうですね。今、旦那様の様子をみてから、すぐに戻りますから。あ、好物のチェリータルトも焼きましたよ」アンナは、まるでフランクは風邪を引いて臥せているだけみたいな言い方だ。

ダイニングに入ると、驚いたことにエレノアが皿などを並べていたシンブルな白いドレスは、飾りがなくとも引き立って見える。

「おはよう。ウィル。ドクター。お茶にする？ コーヒーかしら？」

「俺には、熱いコーヒーをくれ」

ドクターの声にウィルは驚いて振り向いた。ドクターは無精ひげのあくびをしながら、乱暴に椅子を引くとそこに座った。

「ウィルは？ ミルクを温めましょうか？」

ウィルは、あからさまに子供扱いされ、不機嫌な顔を向けた。

「冗談よ。でも。他はすべて真実よ。受け止めなさい」エレノアは、きつぱりとした声で言った。

「おまたせ致しました。すぐに用意ができますからね。みなさんお腹がすいたでしょう」アンナがキッチンに急いだ。

「頼むよ。アンナ。なんでもいい早く食わせてくれ。食ったら、仕事に戻る。フランクはもう大丈夫だ。また夜に様子を見に来る」

「今は、仕事は何を？ドクター」エレノアが聞く。

「今は、どでかいビルの上から下まで掃除している。骨がおれるが情報は入りやすいな」

ウィルは、目だけでまわりを見回した。

アンナ。エレノア。ドクター。

「どうした坊主。頭に血が行ってないのか？いいや。まわりすぎたかな……刺激がつすぎてさ」ドクターは、下衆な笑いをおさえなかった。

ウィルは、目線をずらしたが、ともにエレノアの青い瞳にぶつかってしまい、今度は下を向くしかなかった。その先にアンナが卵料理の皿を置いてきた。

「アンナ。今日は学校を休んでいいよね？まだ少し熱もあるし。行く気分じゃないし……」

アンナは、エレノアと目を合わせ、エレノアが口を開いた。

「いいわ。ウィル。そうなさい。二、三日は、家から出ないようにしてほしいの」

「僕はアンナに聞いたんだけど」ウィルは、いらついて卵をフォークでつついた。

「坊ちゃん。エレノア様のおっしゃるとおりになさってください」ウィルは、ひどく不快な音をたててフォークを皿に置いた。

「馬鹿が！いじけている場合じゃない！お前が危険だから、みな心配しているんだ！」ドクターはウィルのシャツをつかみ上げると椅子から立ち上がらせた。十分にウィルの方が背が高いのを気づかせない迫力があつた。

「僕は、マフィアじゃない！関係ないだろう！」ウィルの気持ちに火が付いた。

アンナがそばによつて、ドクターの腕をはなさせると、ウィルの肩を抱いて椅子に坐らせた。ドクターは、椅子に憤然と坐ると、目の前の皿を平らげだした。

「ドクター。いいのよ。どちらにせよウィルは、この家を出る日は近いのだから」

ウィルはこんな所にいたくないとばかりに立ち上がった。

「家を出るつて？もちろん出ていく！秘密がばれたから、置いてけないんだらう？殺さないのはお情け？」

「坊ちゃん！」アンナが泣きそうな顔をしている。

「ウィル。違うのよ。あなたをそばに置くのは、相当な危険を伴っているの。足を引つ張りたい人間は一杯いるの。わたしがされたようにね。だから、あなたが成人する１８までは、フランクと仲間が守り続けるけどそれ以降は、もう二度も会えなくなるのよ。あなたを引き取る時にフランクが決めた事なの」

ウィルは、エレノアの目に嘘がないのを感じると、体中の力が抜けてゆくを感じた。

「お坐りなさい」ウィルは素直に椅子にかけた。

「じゃあ……エレノアの妹は？守りに失敗したの……？」

ドクターが口をはさんだ。「わかんねえ奴だな。フランクはトップだからだよ。特別だ。普通は、素人なんぞ守らねえ」

「ドクター。仕事に遅れるわよ」有無をいわせないエレノアにドクターは、口にチャックする仕草で答えた。

「ドクター。サンドウィッチとチエリータルトをお昼のお弁当に……」

アンナは、何もなかったかのように笑顔で紙袋を差し出し、ドクターは、ありがたいと受け取った。

「懐かしいわ！あのタルトね！」エレノアもそれにならうように嬉しそくに言った。

「はい。このタルトの秘密の隠し味をお教えしたのは、あなたのお母様にだけです」

「わたしは、作った事はないけど、妹は、受け継いでいるわ」

ウィルは、二人のやりとりを呆然と聞いていた。

「エレノアもロシアの亡命者さ。アンナの件がきっかけでフランクと仕事を始めた。縁ってやつは、妙なもんを引き合すもんさ」

「アンナの件って？」ウィルは小声で聞いたがエレノアが冷たい視線をよこしたのでドクターは、あわてて残りのコーヒーをあおって、口にあふれさせ、しみのないクロスを汚し、今度はアンナに睨まれ、早々に退散していった。

第七話 アナスタシアとフロレンス

フロレンスは、ウィルが出てゆくドアの音を背中で受け止めた。胸が張り裂けるような思いを抱えながら、はじかれたように鏡台の引き出しを開けると、下の方に隠しておいた手紙を取り出した。それは、二年前に届いた。

フロレンス様

わたくしを覚えておいででしょうか？

病院でお会いしました者でございます。

わたくしは、エレオノーラ様の遺言をお預かりいたしました。

エレオノーラ様がお亡くなりになりました。

ご病気でした。

とても、安らかにご両親の元へ、旅立たれた事をお伝えいたします。

エレオノーラ様からのお言葉を伝えさせていただきます。

直筆のものは、もうございません。

そついう決まりなのでおゆるしく下さい。

愛しいアナスタシアへ

もう一度あなたに会いたかった。

でもかないそうにありません。

あなたが毎日笑って過ごしてくれることが私の願いです。

私が歩けなかった、平凡で小さな幸せに満ちた日々を送ってくれていると信じています。

わたしは天国であなたを見守ります。

エレオノーラ

フラウは、名前変え、ずっと噂の届かい誰も知らない遠い町にやってきてもなるべく人に会わないような仕事を選んでひっそりと暮らしていた。ずっと人が怖くて、笑顔をむけてくれる人にも恐怖を感じ

じていた。

この手紙を受け取って、彼女はその暮らしをやめた。あえて、多くの人に触れなければならぬ、デパートに勤め出した。亡くなった姉の想いを無駄にしてはいけぬ……それだけの気持ちで彼女を突き動かしていた。

新しい友達もできた。聞きなれない名前で呼ばれる事にも慣れ、当たり前のように笑えるようになった。

でも、友達がボーイフレンドの友人を紹介するからWデートをしようとかの誘いには素直に受けることはできなかったし、ダンスパーティーにも行かなかった。知っている人であっても体に触れられるのがたえられなかった。

「フラウは初心で男嫌いね」

女友達に肩をすくめられてもかまわなかった。

そんな頃、デパートの取材担当としてウィルがやってきた。新米の記者らしい、一生懸命さがまわりのスタッフに受け入れられていたが、フラウには、彼が何かから逃れるように仕事をしているように思えた。いつも楽しそうな色を浮かべる瞳の奥に時折、違うものを感じた。

互いに孤児だったと知り、よく話をするようになった。

でもウィルが夕食や映画に誘ってもフラウは、いろいろ理由をつけて断った。

「日曜日の公園で、お日様にあたりながら散歩だけしない？日が暮れる前に家まで送るって約束するよ」

ある日のウィルの誘いに断る理由が見つけられず、フラウは頷いた。

何度、短い昼間の散歩デートをしただろうか。うつかり手が触れてもあわてるフラウにウィルは嫌な顔をしなかった。

フラウは彼を愛するようになっていた。自分にそんな気持ちが起くるなど生涯ないと思っていたのに。ダンスパーティーにフラウがウィルと現れた時は友達がみんな驚いたが、すぐにみなが笑顔で迎え

てくれた。

でも、今夜、すべて壊れてしまった。

ウィルは、「アナスタシア」に起きたを知っていた。二人は、ずっと前から皮肉な運命でつながっていた。あんまりだ。

それから、ウィルは、それ以上に何かの秘密を抱えている。それが二人の間を絶望的に引き裂いた。

それは、なんなんだろう。ほんとうに克服できない問題なのだろうか。いいえ。そんなのは都合の良い慰めだ。自分のような目にあつた娘と結婚したいなどと思うわけがない。

あの事件以上につらい事はないと思っていたのに……。

フローレンスは、泣くことができなかった。とうの昔に涙は枯れてしまったのだ。

第八話 別れ

ウィルは、アパートの鍵穴にうまく鍵がさせずにいた。あまりに鍵穴に奇妙な音をたてたせいか、隣の老婦人がそつとドアから顔を出した。

「あつ……すみません」鍵がやっと開いた。ウィルは中に滑り込みながらひきつった笑いを向けた「おやすみなさい……」

部屋に入るとまっすぐにクローゼットの奥深く、棚の上にしまい込んだ箱をたぐりだしていた。手がすべり、中身をぶちまけてしまったが、かえって探しやすいになったとばかりに、目をはしらせ、一通の手紙を探りだした。

差出人は、あのドクターだ。

意外な事に、ドクターの字は、丁寧で美しい

初めてこの手紙を読んだときウィルは、彼が投げてよこしたきれいなハンカチを思い出していた。

ウィルは、二年ぶりにその手紙を読む。もう一言一句頭に入っているほど、読み込んだ手紙を。

ウィリアム

俺を覚えているか？ドクターだ。

俺がこの手紙を送るということは、遺言の執行人としての役目が来たという事だ。

俺は、フランクの執行人だ。

フランクが死んだ。

自殺したんだ。

フランクがお前に残した言葉は、ごく短い。

すぐ、書けちまう。

でも、俺は余計な事も書く事にした。

お前は知る権利がある気がするからだ。

エレノアの裏切りが、発覚した。

ボスは、フランクに、エレノアの始末をつけるよう命じた。

フランクは、人にたのまず、自分でエレノアを葬った。

それが、パートナーへの礼儀だと。

奴の考えそんな事だ。

エレノアはフランクの事を愛していた。

「白氷の女」と呼ばれるあいつがだ。

でも、まあフランクは女には興味がない。

おおっと。これは脱線だな。

フランクは、苦しんでいた。

エレノアは最愛のパートナーなものにはかわりはない。

最後の方には、睡眠薬を渡してやるほどだった。

アンナもそりや心配して、できる限りそばで見張っていた。

でも駄目だった。

フランクの遺言を伝える。

奴が書いたものは焼き捨てた。そういうルールなんだ。

ウィルは、二枚目を引き上げた。

ウィリアム。

二度と闇に囚われるな。

お前は光の中で生きる。」

F

「おはようございます。坊ちゃん。旦那様がお呼びです。学校に行かれる前にいらしてほしいそうです」

ダイニングに入ったウィルがアンナにそう言われたのは、フランクが怪我して帰ってから3日たったある日。ウィルは、今日から学校に行くようにエレノアに言われていた。

フランクは、ベッドに起き上がっており、少なくとも見た目はいつ

もの彼だった。髪はきちんとして、顔もきれいにあたってある。寝間着さえ、しわひとつない。

「そこに座りなさい」

ウィルは、ベッドの横の椅子に素直にかけた。

「すまなかった、ウィリアム。お前には何も知らせないつもりでした。なのに最悪な形で唐突に伝える事になった」

「18になった途端にどうやって放り出すつもりだったの……無理だと思ふ。何も知らせずなんて」ウィルはカーペットの柄を見つめながら言った。

「お前は、西部の大学に行くといっていたし、とにかく遠く離れた時をチャンスにわたしは、事故で死ぬ事になっていた。ちよつとした連絡ミスで、お前がもどった時には墓に埋葬済みという算段だった」

「マフィアってハリウッドかスパイ並みだね」皮肉を含んで言い放った。

「簡単に口にしてくれるな。一言では、片付けられない……」

「でもマフィアなんでしょう。本当の父親よりフランクをずっと好きだった。フランクみたいな大人になりたいって思っていた。でも裏切られた気分だ。僕の気持ちわかる？ 汚い金でぬくぬくと育ってきたって知った僕の……」

フランクは、悲しい目でウィルを見つめた。ウィルは、フランクから目をそらした。

「今後の進学の資金にはお前の親が残した金を使う」

ウィルは、はじかれたようにフランクを見た。

「親のつて……財産なんて何もないって……牧師さんが言っていた。はつきり覚えている」

「兄はお前にわずかな金を残していた。それを大伯母と牧師が搾取した」

「そんな……」

あの牧師さんが……彼だけが僕に優しくかった。

「信じがたいだろうが真実だ」

「脅したの？」

「きちんと弁護士をたて、まっとうに行った。書類もある」

「二人は警察につかまったの？」

「付き出さないかわりに、金を返させた」

ウィルは、エレノアが言った言葉を思い出していた。

善が悪を持ち、悪も善をもつ。

「ウィル。つらいがすべて事実だ」

フランクは傷が痛むのか顔をしかめた。ウィルは、咄嗟に手を差し伸べ、枕を低くし、体を横たえさすのを手伝った。

「ありがとう……」

「水を飲む？薬？アンナを呼ぼうか？」

フランクは、片手で遮った。

「ウィル。お前の金は、この好景気に投資して、3倍になった。だからそれで大学に行きなさい。言っておくがまっとうに投資しただけだ」

「わかったよ。もういい。僕こそ、ごめん。ひどい事言った……あの一つだけ教えてほしい」ずっとウィルは気になっていた。「アンナは……アンナもマフィアなの？」

ウィルは、割れる寸前の風船を持っているような顔をした。アンナは、ウィルにとって母親と同じだった。

「アンナはソ連のスパイだった」

「え？」

思わぬ答えにウィルは聞き返した。

「ソ連は、アメリカに亡命した者の弱みを握り、アメリカでスパイ活動をさせていた。アンナは、夫と幼い娘が国に残っていた。彼女は、皇帝の女官だったから、その立ち居振る舞いが認められ、政府高官の邸で働き、情報を流していた。その頃、は、そういう者を見つけ出し、味方につけ二重スパイに仕立てる仕事をしていた」

「——そういうのって、CIAの仕事じゃないの？テレビドラマで

まさにそういう番組があつた」

「CIAだつて公務員だ。何かあれば保障が必要だが、われわれがつかまつて殺されたつて、政府は痛くもないからな」

「じゃあ……アンナは今もスパイ活動をしているの？」

「ずっと昔の話だ。アンナは、今はただのアンナだ。娘も無事に亡命できたからな」

ウィルは、子供の時に、アンナがフランクは恩人だと言つたのを思い出した。

「エレノアも最初はそうだったの？」

「——そうだな。まあ。少し違うが……。さつきも言つたが一言では片付けられない」

ウィルは、唇をかねて組んだ指を強く握つたり開いたりしながら考えをめぐらせていた。聞きたい事は山ほどある。だが全部に答えてもらえるわけではない。

「ドクターもエレノアも悪い人には見えない……エレノアはすごく上品できれいだし、ドクターも……すごく味のある人だね。なんかゆっくり話をしたい感じ……」

「ウィル。彼らがここで見せている顔がすべてじゃない。それを信じるな」

「フランクも？」

その瞳には、真実が知りたいと書かれている。フランクは、ひどく落ち着いた彼の言い方に聞きたいのはそつちかと理解した。ほんとうに子供だと思つていたのに言葉を仕掛けてくるようになったとは、驚きだ。

だが彼の方がまだまだ上手だった。

「お前、ガールフレンドが二人いるだろう？」

「え？何？」ウィルは、突然ふられた思わぬ展開にあわてた。

「知っているぞ。同じ学校の金髪と女子高のブルネット。二股かけるとは最低の男がすることだ。それだけは言っておかないと死んでも死にきれん。まったくそれを知つた時は悲しかった。お前をそん

な情けない男に育てた覚えはない――。」

「僕の事を見張っているの！」

「お前を危険にさらさないためだ。最低限のプライベートは守っている」

「そ……そんな……。守るってそういう事なの」

「すぐに二人と別れなさい」

「えっ、その二人ともいつぺんに？ふっつうはどちらかにじゃないの？」

「二人と付き合えるのはどちらとも真剣に向き合っていない証拠だ。本当に好きな娘に出会えば、他に目はいかんはずだ」

「フランクって意外にロマンチストだね……」

ウィルは気恥しいのを隠すように顔を下に向けた。フランクは手を伸ばし、その顔を上げさせるとま

つすぐに目を見つめながら言った。

「ウィリアム。女性を女性の事で悲しませるのは最低の男がする事だ。お前にそういう男にはなってほしくない」

「それって……おじいちゃんの事？」

ウィルの記憶に残る祖父は、ただ愉快な人でしかない。彼が妻の他にも子供を産ませたなんて田舎の町ではすごいスキャンダルだったのだろう。しかも相手は東洋人。家出をした「弟」の事は、家族の記憶からその町からもかき消された。

「彼は……優しいが弱い人間だった。お前は、じいさんと兄貴によく似ている。まったく似なくていいところが似るもんだな」ため息をもらしながらフランクはベッドの枕に頭を沈めた。

「パパも……まさかほかに子供とかいるの？」

「兄貴は、町で一番もてた。彼とデートしたい女の子は後をたたなかつた。踊りが上手くて、女の子が好みそうな話題を知っていた。でも兄貴がデートに誘っても一人だけイエスと言わない子がいた」
「もしかしてそれってママ？」

ウィルは、両親の昔話を知るのは初めてだった。嬉しそうに椅子か

らベッドはじに座りなおし、少し笑っているフランクの顔を真正面に見た。

「そうだ」

「でもママはパパと結婚した」

「兄貴は、浮ついた所もあったがまわりに疎まれる私を弟として扱ってくれたし、いじめっ子には、立ち向かってくれた。ある日お前のママが町に引っ越して来て、あいさつがわりにデートに誘って断られた。彼には初めての事だ。何度、手紙をもたされて彼女の部屋の窓の下に使いに出されたかわからなかった。手紙に菓子が付くときは、一緒に食べようと言ってくれる優しい子だった。私は兄貴の良い所を力説したよ」

「じゃあ。フランクがキューピットだね」

「そうだな。でも私は15で家出でしたから二人が結婚したのも子供が生まれたのも知ったのは、二人が事故で亡くなったのを知った時だ」フランクはウィルの手をとった。「なんとしてもお前を引き取りたかった。それがあの町で唯一、優しくしてくれた彼らへの恩返しだと思った」

ウィルもその手を握り返した。

「パパはママを愛していた？おじいちゃんのようににはなかった？」

「二人はとても愛し合っていた。お前もそういう相手にいつか出会う——その引き出しを開けなさい」

ウィルは、小さなライティングディスクに向い、言われた通りにした。浅い引き出しには、小切手帳と万年筆だけが入っていた。

「小切手帳は、さっき言ったお前の金だ」

ウィルは、万年筆を手についた。それはとても高級なペンだとすぐにわかった。

「それは、わたしが家出をする時に父がくれたものだ。それが彼の精一杯の親心だった。記者になりたいのだろう？良いペンを持つべきだ——受け取ってくれ」疲れたのか、フランクは小さなため息を

つくと目を閉じた。

「おじいちゃんは、なぜこんな高級な万年筆を？」祖父も父も農場を営んでいた。ペンは書ければいい。

「血は争えんだな。彼は記者になりたかったんだ——」

軽快なノックの音とエレノアが現れた。白いリボンで巻き毛を束ね、白いブラウスに白のスカート。アンナのエプロンをしている。家電のCMに登場する主婦のようだった。

「ウィル、早く朝食を食べなさい。学校に遅れるわよ。フランク。包帯を替えるわ」

ウィルは、妙な錯覚に陥った。フランクとエレノアが自分の両親だったら、素敵だろうと。

「なあに？わたしの顔に何かついてるかしら？」エレノアは、椅子に坐りながらほほ笑んだ。

「別に、二人が、僕の親だったら、楽しいだろうなって」

「あら。それは年が近すぎるわよ」

「騙されるなウィル。エレノアは実はアンナより年上だ」

「ドクター以上に痛くしましょうか？」エレノアは鉄を掲げ、おどけた口調で言った。

「勘弁してくれ。奴の腕はいいが繊細さにかける」

「あら。彼は意外に繊細よ。糊のきいたシャツでないと寝むれないのだから」

「ハンカチだってまっすぐだった」ウィルが加わる。

「服はよれているのにまったくおかしな男だ」

エレノアもフランクも笑っている。朝の陽ざしがやわらかく入る部屋は妙な幸福感に満たされた。ウィルはいつまでもこうしていたいと思った。

「僕も仲間にして……」

二人ともこちらを見なかった。

エレノアは背中を向けたまま、フランクも天井を見ている。

「仲間になれば、別れなくていいでしょ？一緒に暮らさないにして

も、たまに会えるなら。なんか、別に悪い事ばかりしているわけじゃなさそうだし、他の仕事してもいいみたいだし、僕は目指す、記者になる。それとたまにフランクやエレノアの仕事を手伝えればいいだろう！そうしたい。どうすれば仲間になれるの？契約書に血文字でサインするとか？！」

はやるウィルをエレノアが優しく遮った。

「ウィル。アンナが遅刻しやしないかやきもきして待っているわ。学校は何時に終わるの？寄り道せず、早く帰ってらっしゃい。みんなでお夕食を食べながら、話をしましょう」フランクの方に向きながら「それでいいわね？フランク」

フランクも小さく頷いた。

「あ……えっと。4時にはもどるよ。わかった。アンナの血圧上げるわけにいかないね」

「じゃあ後で」ウィルはドアに手をかけながら言った。

「ええ。待っているわ」エレノアは、それは優しい笑顔で見送った。ウィルはフランクに見えるようにペンを持ち上げウィンクしてドアを出た。

随分とげんきな自分に驚く気持ちもあるが、「彼らと別れたくない」これが一番の自分の気持ちだとわかった。

ダイニングに入ると、テーブルのトーストを手しながらアンナの頬にキスをし「行ってきます！夕食は、ごちそうにして！」と言いつつ残しウィルは学校に急いだ。

見送るアンナの顔の悲しい色には気づかなかった。

「ただいま！アンナ！フランク！エレノア！」

口を開くと両頬がひりひりと痛みは大きくなった。ガールフレンド二人に正直に別れを切り出し、手ひどくひっぱたかれた。

鍵をいつもの玄関わきのテーブルに置きながら、その場に妙な違和感を感じた。

「おかえりなさいませ。ウィリアム様」

白髪の品のいい紳士が、奥から現れた。「執事」と言う言葉がぴつたりな風貌。

「あの……どなたですか？」

執事は、とても冷静な顔でゆっくりと瞬きをした。

「なんでございますか？また新しいお遊びですか？」

「……アンナは？」

「ただ今、お茶の用意をしておりますが」

ウィルは構わず、キッチンに向かった。

「アンナ！アンナ！」ウィルは怖くなりながら、いつものあの笑顔を探し求めた。

「はい。ウィリアム様。どうなさったんですか？」

キッチンに立っていたのは、ほっそりと背の高い老婦人だった。ウィルは、踵をかえし、フランクの部屋に向った。

中を開けると、そこには古い家具がしまつてあった。ほこりよけの布にはうつすらと積もる塵が陽にきらめいて見える。

ウィルは、隣の例の鍵がかかる書斎に向った。ドアはなんなくと開き、中は文字通りの書斎だった。

「わたくしの仕事部屋に何か？ウィリアム様」執事は音もなくウィルの背後に立っていた。ウィルは、悪夢を見ているような浮かされる顔のまま、自分の部屋に上がった。

階下から、知らないアンナが心配そうな声をかけてきた。

「ウィリアム様！どうなさったんですか？！お茶のお菓子は坊ちゃんがお好きなチェリータルトですよ！」

彼が返事をしないでいると、執事と家政婦は、一体どうされたのだと細かな会話を交わしている。

念の入った演技だ。

ウィルは、ベッドに体を投げた。

彼は、悲しいどころか、笑いが止まらなくなった。

「まさにハリウッドなみだ！」

見事に捨てられた自分が心底おかしくて笑いは止まらなかった。そして、涙がとめどもなく流れおちた。

ウィルは、この知らない二人と今までもそうであったかのような暮らしをしばらく続け、高校を卒業し、希望の大学に入ると二度この街に戻らなかった。

二人は、それは素晴らしい演技でウィルを送り出してくれた。細いアンナはいつでもお帰りくださいと涙してくれた。戻ったところでこの家は売りに出されているか、別の人間が住んでいるはずだ。

大学を卒業すると育った街の雨の香りと湿った空気が懐かしくなり、いつのまにかすこし似ている場所を求めはじめ、今、住むここに落ち着き、希望の新聞社にも就職した。

背の高い黒髪の紳士とすれ違えば目で追ってしまふ。白いドレスの女を見れば、顔を確認したくなる。口の悪い男の声がするともしかしてと思ってしまう。

そして、どこで食べるチェリータルトもウィルの口を満足させてはくれなかった。

いつも彼らを追い求めた。

もう一度、会いたかった。

仕事柄、裏社会の情報も洩れ聞こえる。どこかで彼らの影が見えないか、いつも気にしていた。もし、彼らが「情報」が必要と頼ってきたら、いつでも最大限の協力を惜しまないと思っていた。

その思慕を断ち切らせるかのようにこの手紙が届いたのだ。

最初、これを読んだとき……しばらくは、どうしていいかわからなかった。半身を引き裂かれるような、悲しみがウィルを襲った。両親が亡くなった時もそうだったのだろうが子供すぎて覚えていない。自分がそばについていたら、フランクの死を止められたかもしれない。もっとうまく、気持ちを隠して慎重に対応していたら、予定通り18まで彼らと過ごせたかもしれない。その間には、なんとかフランクを説得し、もっとそばにいられる方法が見つかったかもしれない。

そんな思いが余計に彼を苦しめた。抜け殻の気持ちをまわりに隠しながら、ウィルは仕事に打ち込み、どんな小さな仕事も率先して、自分が行った。くたくたに疲れて何も考えられなくなって眠りに落ち、また起きてすぐに仕事に向かう。ただそうやって時間が過ぎてくれるだけが幸せだと感じていた。

そんな時、デパートの催事の取材で、フロレンスと知り合った。その名のとおり、花のように笑う娘だった。きっと、温かい家庭で、何不自由なく育った子なのだろうとウィルは思っていた。ひよんなことから、孤児だという事を知り、彼女に対する気持ちが大きく変わっていった。

でも何度デートに誘っても彼女は首をたてに振らない。ウィルは慎重にフラウがノーという条件を選びだし、それを取り除くと言った。「天気がよかったら、お昼に公園で散歩しない？」

『縁ってやつは、妙なもんを引き合す』
ドクターはなかなかの格言者だ。

第九話 過去

彼女の忌まわしい過去の事件をまったく気にならないのかと言われれば嘘になる。でもそれ以上に自分が愛する家族が、彼女が愛する家族を殺した事が重かった。それを隠して、一緒にいるなどできるわけがない。

フラウに言うべきなのか。

——君の姉さんを僕の叔父さんが殺したって——
そんな事、言えるわけない。

コンロの火をつけると、ウィルはその手紙を焼いた。こんな風に忌まわしい運命のいたずらをなくしてしまえたらいいのに。

手紙が焼け落ちるのとほぼ同時に玄関のドアにノックが響いた。

ウィルがのぞき窓を見るとそこには見知らぬ少年が立っていた。物乞いの恰好ではなかった。不思議に思いながら、ドアを開けると彼は、「頼まれた」とぶっきらぼうに言うと妙に膨らんだ封筒を渡してきた。

下で親が待っているようで母親が彼を呼び寄せる声がした。背を向け去ろうとする少年にウィルは尋ねた。

「誰に頼まれたのかな？」

「知らないおじさん！」彼は振り向かず言いながら階段を降りて行った。

ウィルは、ドアをしめずに封筒を開いた。中には、カードとさつき投げ捨てた指輪がはいっていた。

「そんな……馬鹿な……」

突然、玄関にノックの音にフローレンスは我に返った。フローレンスは、もしかしてと小さな希望を胸に部屋を飛び出てリビングをぬけ、ドアを開けた。

そこには誰もいなかった。

人は…いなかった。

白いリボンを巻いた黒い子猫が一匹、籠に入って鳴いていた。フローレンスは、階段を下りる白い影に気づいた。

「あの！すみません！まって！」

すぐに猫のはいった籠を持ち、後を追いかけて間をつめる事ができず、白いドレスが外玄関のドアをすり抜けるのを目の端にとどめながら、フローレンスはつまずき転んでしまった。

猫と籠も放り投げられた。猫は器用に着地し、小さな何かが転がっていた。

膝をすりむき、立ち上がった彼女の足元にそれが当たった。

フローレンスは、目を見張った。

拾い上げたそれは、対のピアスだ。

右の耳に手を当てたが、ピアスはきちんとついている。

子猫の甲高く鳴く声にフローレンスは、小さく息を飲むと子猫を抱いて外に飛び出て、あたりを見回した。

向こうはまだ市場のにぎやかな明かりが見える。こちらは、うす暗い路地がつづく。

「エレオノーラ！」

フローレンスは路地に向って叫んだ。

「姉さんでしょうか？生きていたのね！死んだなんて嘘なのね！お願い、私も連れて行って！」

闇から返事はない。

「お願い……もう。ここにはいたくないの」フローレンスは一步踏み出た。路地の闇から懐かしい声が聞こえた。

「来てはいけないわ。あなたは、こちらに来てはいけない」

ウィルは階段を駆け下り、さっきの少年を探し、左右を見回した。雑踏の中、両親に手を引かれている彼を見つけた。その姿は、ウィルが思い描く将来の自分だった。フローレンスと築く未来のはずだった。ウィルは、走った。走るのは得意だ。記者は足が命だ。

何人にぶつかつたか、非礼をわびながら、先を急ぎ、彼らに追いつく事ができた。人の良さそうな夫婦は、いぶかる事もなく、依頼人の人相を話してくれた。

「背の高い紳士でしたよ」

ウィルは丁寧に礼をのべるとまた走り出した。握りしめるカードにはこうかかれてあった。

愛する者を守れないなど

最低の男のする事だ。

F

廃墟になったウィルの心に希望の花が咲きはじめた。

フランクは生きている。きっとエレノアも！

彼らは、別れてなおウィルが自分たちを恋しがり追い求めるのをよしとしなかった。だから、あきらめがつくように残酷な結末を用意したのだ。

彼らはそういう闇の中に生きているのだと。知らしめるために。

きっと、その後もフランクは、ウィルが闇に目をむけずに歩き出した気にかけていただろう。そんな時、会はずのないフラウとウィルが出会い恋に落ちた。よかれと用意した結末は、二人を引き離す要因となってしまう。

フランクは、生き返らなければならなくなった。

市場は、まだ明かりをともしていた。

「あれ？にいさん。どうしたね？」花屋の親父が声をかけてきた。ウィルは足をとめ、ポケットに手を入れた。指輪が手にあたった。それから、もう札は入っていない。もう一探すると5セント硬貨に触れ、ウィルはそれをつまみだした。親父は、何もいわずそれを受け取るとチユーリップを一本差し出してきた。

ウィルはそれを手に歩き出した。角を曲がれ

ば、フロレンスのアパートが見える。

過去は気にしないといいながら、誰よりもそれに縛られていたのは自分だ。愛する者に気持ちが引き裂ける思いを与えてしまった事だけを悔いていた。

プロローグ

フロレンスは、猫を抱いたまま、暗闇を見つめていた。
もう人の気配は消えてしまった。

「フラウ！」

ウィルの声にフロレンスは、振り返った。彼は、息をきらし、そこに立っていた。

ウィルは花をフロレンスに差し出した。彼女は、猫を抱いたまま、手をのびし受け取ったがその顔は、あまり楽しくない夢の中にいるようなそんな感じだった。

「僕が間違っていた。これからの長い人生できっとたくさんの試練がある。二人でそれを持ち越えなければいけないのに、さっそく僕がくじけた。フラंकとエレノアの事が嘘じゃなくてもそんな事に負けるようじゃいけないんだ」

「わからないわ……嘘って？……姉さんが生きていたこと？」

「フラウ。僕らが愛してやまない彼らは、生きているけど、どんなことがあっても会うことはかなわない。いけないんだ」

「姉さんは、さっきすぐそばにいたのよ……顔を見られなかったけど、こちらには来ていけない。あなたは、光の中を歩くのって」

フロレンスは、猫をなでながら、ゆっくりとさっき姉がいた、暗い路地に向いた。

まるでその暗闇に引き込まれそうだ。

ウィルは怖くなってその肩を振り戻すと抱き寄せた。

「僕が君を守るから。だからもう彼らの事は忘れよう。それがフラंकとエレノアの願いなんだから」　はさまった猫がばたついて、ウィルの胸をひつかいた。体を離すと猫は、飛び降り、耳を掻いた。ウィルは、指輪をポケットから出すとフロレンスの指にはめた。フロレンスは、静かにそれを見つめた。

「わたしの過去を知っても嫌いにならないの？」

「僕も君も、過去のすべての日々の積み重ねでここに立っている。そうだろう？すべてひっくるめて全部自分だ」フラウの瞳が揺れた。「違うかい？」

「わたし……いっぱいお料理したのよ。もう冷めちゃったけど……」
「温め直せばいい、手伝うよ」

「チェリータルトを焼いたの。あなたにはこだわりがあるから、好みかどうかはわからないけど……ママが残したレシピなの。とても変わった隠し味がいっているのよ。知ったらびっくりするわ」

アンナのレシピだ。ウィルは体中をかけぬける感動を抑えきれず、フロールを抱き上げるとくるくると回りだした。「それは絶対最高なタルトに違いないよ！」

「ウィル！やめて！怖いわ！」それを止めるかのように子猫がウィルの足にからみつき、ひっかいた。

ウィルは、フラウを抱きとめたまま、腕をのばし子猫を抱き上げた。「こいつ腹を減らしているな。僕も腹ペコだ」

フラウは花が咲くようなあの笑顔をむけてくれた。

「フラウ。花嫁衣裳を縫うのにどれくらいかかるの？出来上がり次第に結婚しよう」

「——すぐよ。みんなが手伝ってくれるわ。明日、生地を買うわ。社員割引よりずっと安いお店を知っているの。その花屋さんにスズランとライラックとすみれの花を頼むわ」

「僕は急いで家を探すよ。ハネムーンにはしばらくいけないけど」
「そんなに仕事を休んだら首になっちゃうわよ。代わりに公園にピクニックに行きましょう」

「結婚指輪を買うのに前借が必要だ」

「クリップを曲げて代用したっていいわ。神様もわかってくださるわよ。後で買った時に牧師様にお祈りしていただきましょう」

「付添人を頼んで」

「教会の空いている日をおさえなきゃ」

「ウェディングパーティーは？」

「アルのお店に頼みましょう。格安でね」

二人からは、さつきするはずだった幸せの会話が止めどもなくこぼれ出した。

ウィルは、その頬を掌で包み、キスをした。

「二度と君を悲しませたりしない。約束する」

フラウの頬に喜びの涙が一滴流れた。

二人は寄り添いながら、水たまりを飛び越え、暗い路地から遠ざかった。

向こうに見える市場の明かりが、祝福するように輝いて彼らを包み込んだ。

男は、目を細め、二度と見られないその姿を脳裏に焼き付けるように二人を見送った。

「花嫁を送り出す父親みたいな顔になっているわよ」

「なんとでも言ってくれ」男は帽子を深くかぶり直すと腕時計を見た。

「汽車の時間だ。行こう」

「ええ」女は白い旅行着とそろいの帽子のベールを下げた。

闇にさす、わずかな月明かりに彼女の美しい微笑が浮かんだ。

「——ほんとに君はいくつなんだ？」

女は、男の腕を引き寄せ組むと、男の帽子のつばを指で押し上げ、その黒い瞳を見つめた。

「あなたが絶対言ってくれない言葉が聞けたら……おしえてあげてもいいわよ」

二人は、深い闇の中に消えて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2535w/>

in the darkness

2011年11月24日10時10分発行